

## 人間はどこまで動物か ②

人間の存在様式全体が、人間によって積極的にさがしもとめられた一つの自然領域のなかに特別な人間の「世界」を創りだす……動物の本能的な行動を「環境に制約された」(umweltgebunden) とよぶならば、人間の行動は「世界に開かれた」(weltoffen) といわなければならない。

—————アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』

基本的に「巣立つもの」であるはずの人間の新生児は、なぜか極めて未発達な状態で生まれてくる。ポルトマンは、「人間は生後一歳になって、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に、やっとたどりつく……この人間がほかのほんとうの哺乳類なみに発達するには、われわれ人間の妊娠期間が現在よりもおよそ一カ年のばされて、約二一カ月になるはずだろう」(61頁)と述べている。

本来、約21カ月の妊娠期間を経て誕生するはずの人間の新生児は、なぜ10カ月に「生理的早産」するのか？ この理由については、直立歩行をはじめた人間の骨格の変化や極端な脳の発達など、さまざまな見解が議論されているようである。実際、誕生後1年を経過した人間の子どもは、とても母親の狭い産道を通り過ぎるような大きさではない。

とはいえ、門外漢である筆者が、ここで生物学的な議論に立ち入ることは、あまり有意義ではないだろう。はじめてポルトマンの著作を手にしたときから、筆者が興味を惹かれているのは、こうした人間の存在様式こそが、本能によって定められた行動様式が著しく後退している人間の在り方を決定していると、彼が主張していることである。

ほとんどの動物は、その誕生の時から生活すべき環境がある程度決まっている。シャチの体や行動様式は、海の中で暮らすのには適しているが、彼らは陸上で生活することはできない。もちろん、人間も水中で生活することはできないが、人は環境に適応して自らが生活できる「世界」をつくりだす。環境を生活可能な空間に作り変えることができるなら、水も空気も存在しない宇宙空間にさえ、人は居住空間を作り出すことができるだろう。とはいえ、人間が生活環境としてつくりだす世界は、自然環境としての世界そのものではない。

極めて不完全な状態で生まれてくる人間の新生児は、環境に適合するように予め決定された本能的行動様式が著しく後退しているために、はじめから「人間」として「世界」に生まれるのではなく、生まれ落ちた文化的・社会的環境/世界のなかで「人間(自分)」になる。また、誕生後の人間がそこで「自分」を形成していく世界は、自然環境だけに左右されるものではない。多彩な言語や生活習慣、さまざまな社会制度やシステムが、それぞれの人間が「自分」になるための多様な「世界」を形成する。日本の地域に生まれた人間が、生得的に日本語を発音して理解するのに優れた肉体を持っている訳ではない。両親は日本人であっても、米国で生まれて育った子供は、普通は日本語より英語の方が流暢になるものだ。

\*

人は人間として生まれてくるのではなく、生まれ落ちた世界のなかで自分になる。オオカミに育てられた野生児の物語を鷓呑みにすることはできないが、新生児を一切の文化的・社会的接触から遮断すれば、言葉を話すことも社会的ルールを身につけることも不可能なことは間違いない。人間はシャチのように、生まれた瞬間から泳ぎ出すことはできないのである。

人間の新生児が、大人と同じような行動様式を身につけるのには、かなりの時間がかかる。この間に、新生児は生まれ落ちた文化的・社会的環境のなかで「自分」になっていく。人が自分になることを可能にする、文化と社会の綱目としての「世界」は、本能的な行動様式を決定する、自然環境としての「世界」とはまったく異質なものだ。

もちろん、人間の新生児にも本能によって決定された行動様式は備わっている。生まれたての赤ちゃんの手に指をあてると、痛いほどの力で握りかえされることがある。しかし、自然環境に直結した本能によって定められた行動様式は、人間の存在を決定する主要因ではない。

\*

「環境(世界)に制約された」(umweltgebunden) ほかの動物たちとは違って、人間の行動は「世界に開かれた」(weltoffen) ものなのである。同時代のヘルムート・プレスナーやマックス・シェラーの影響のもとで、華麗に展開されるポルトマンの人間理解は、極めて刺激的で説得力がある。

本能による決定が著しく後退している人間は、自分が誰であるかを決定してくれる意味の綱目としての「世界」を必要とする。後にポルトマンの影響を受けたアルノルト・ゲーレンが、こうした本能欠落動物としての人間の存在様式が、文化や社会システムの起源であると主張するように、意味の綱目としての「世界」は、自然環境としての「世界」と同じではない。

人間が、その動物としての特殊な存在様式のもとで創りだす意味の綱目としての世界。ポルトマンは、「この人間の特別な世界を『文化』とよんで自然と対置してもいいだろうし、また『人工的』として自然的な環境と区別することもできよう」(90頁)と述べている。つまり、人間は「生理的早産」という存在様式の特異性によって、自然世界と直結した本能の定める行動様式からは、ほぼ自由(もちろん、完全に自由ではない)になる一方で、この自らが創りだす意味の綱目としての世界に、とらわれることになるのだ。

「世界に開かれた」自由を享受する人間は、環境(自然世界)をつくり変えることによって、無限に存在の可能性一繁栄へむかうか、破滅へ向かうかは別にして一を拡大していくだろう。しかし、人間存在の非決定性(本能による決定からの自由)は、人間に完全なる自由を与えることはない。

なぜなら、何にでもなれる可能性が与えられているということは、一方で何も決定していないという不安に、人が直面することでもあるからである。